

Reference Scope from the Experts

エキスパートが選んだこの一報

「Hill LW, Sulzberger MB: Evolution of atopic dermatitis: Arch Derm Syphilol. 32: 451-463, 1935」



片山 一朗

大阪大学大学院医学系研究科
情報統合医学皮膚科学講座 教授



プロフィール

1977年北海道大学医学部卒業。大阪大学皮膚科入局。1980-1981年英国Royal College of Surgeons病理学教室留学、1985年国立大阪病院皮膚科(厚生技官)、1986年北里大学皮膚科助手、1987年同講師、1990年東京医科歯科大学皮膚科助教授、1996年長崎大学皮膚科教授を経て、2004年より現職。

現在第一線で活躍されているエキスパートの先生は、いつ、ご自身の研究テーマや臨床に影響を受けるほどの論文と出会ったのか。前号の執筆者からご推薦いただくリレー形式で今回もエキスパートの先生にご登場いただき、臨床医家としての目のつけどころ、論文のどこに注目し感銘を受けたのか、その後ご自身の研究とその発展にどのように絡んできたのかなど、エキスパートとなられた先生の目線で、論文と向き合う心構えやヒントを語っていただいた。



要旨

アトピー(素因)とよばれる、ある種の物質(多くはタンパク質)への過敏性状態が、乳幼児から成人にみられる特徴的な皮膚炎(アトピー性皮膚炎)発症の病因となることは明らかと考える。注意深い観察により、アトピー性皮膚炎は他の皮膚炎とは明確に鑑別ができる。その臨床像と即時性反応を惹起する物質は患者の各年代で異なるが、この皮膚炎を生じさせる基本的な発症素因はどの年代でも共通している。多くの症例で特異的なアトペン(アレルギー惹起物質)や患者が過敏性を示すアトペンを除去することが、この皮膚炎を治癒ないし改善させるが、一部の症例では改善がみられないこともあり、現在の診療技術では全く未解明の他の発症因子があることも疑いのない事実である。半数の患者では過敏性を生じやすい素因が遺伝性であるという病因論(アトピー素因)を支持する明確な根拠があるが、それ以外の特定の患者が外界の蛋白に対して容易に過敏性を獲得する理由は不明であると言わざるを得ない。正常人に対してアトピー性の過敏性を獲得させる多様性因子が理解できるようになるまで、そしてこの多様性を直接制御できるようになるまでは、アトピー性皮膚炎の最善の治療は、対症的ではあるが無理のない局所ないし全身療法である。もちろん、特異的な過敏性物質を明らかにし、原因となるアトペンを食餌や生活環境から除去することや、一部の限られた患者ではあるが減感作療法を試みることも考慮されるべきである。このような治療法は挑戦的ではあるが、決して満足のいくものではない。



コメント

論文との出会い

北里大学にいた頃、京都大学の太藤重夫教授(当時)などいわゆる京都学派の先生から、アトピー性皮膚炎はギリシャ語の「Strange」という言葉に由来する、あるいはローマ帝国初代皇帝のアウグストゥスが今で言うアトピー性皮膚炎であったとの話を聞き、その中で取り上げられていたのがSulzberger達の論文であった。

何に注目したか

アトピー性皮膚炎という病名が初めて使用されたのが1933年刊行のYear-BookでのWiseとSulzbergerの巻頭言であることはRajkaの教本で知ったが、特に記憶には残っていない。数年前から、入手が困難な昔の皮膚科領域の原著論文を訳し、「Dermatology classics」として若い先生に読んでいただくというプロジェクトを始めた。上記1935年のArch Derm Syphilolの原著論文を読む機会があり、あらためてHillとSulzbergerが報告している観察や記載が、現代のアトピー性皮膚炎の問題点を正確に予測していることに驚いた。

どこに感銘を受けたか

多くのガイドラインの中では、アトピー性皮膚炎を「乳児～小児期」の疾患という前提で診断、悪化因子対策、治療法が記載されており、思春期以降の患者の病態や治療の実態がほとんど記載されていない。HillとSulzbergerはすでに80年以上前に「アトピー性皮膚炎の基本像はどの年代であれ、同じではある。しかし、多くの例で、各年代の同じ患者が年ごとに多様な症状を呈することに不思議さを禁じ得ない。子供は単純に小さな大人ではない」と、その皮膚症状の多様性や経年的な変化を“Evolution”という言葉で記述している。

どのように自身の研究とその発展に絡んだか

「小児では拘束されるには大きすぎ、自己を規制するには幼すぎる。またどのような外用療法が行われても、また原因となるアトペンが除去されたとしても、満足する改善が得られないことがある」との記載は成人患者にも通じ、アトピーアレルギーと痒みの誘発がどう関連するのか？ 搔破行動による痒み感覚のImprintingがどう成立するのか？ アトピー性皮膚炎の根本治療は可能なのか？ という、私の研究テーマに大きなインパクトを与えてくれた。

論文に向き合う心構え

皮膚科の臨床でもその膨大な歴史をもう一度よく見直し、何が解決されていないか、どのような治療が応用可能か、原著論文に向かい、考え、そこからまた新しい病態研究や治療の開発を始めていければと考える。